

# 雑誌『旅』に見られる近代日本人の中国観について

—大正13年から日中戦争の終わりまでを対象として—

楊 沛

---

**Abstract:** This study is to examine the early-modern Japanese perspectives on China from 1924 to the end of the Second Sino-Japanese War as seen in “*Tabi*” (Travel), the first full-fledged travel magazine in Japan. Throughout its articles, the Japanese who traveled in China avoided contact with Chinese people and made little depiction of extolling the scenic historical sites of China. They were more interested in the “pilgrimage to the battle sites.” By visiting glorious battle sites such as 203 Hill on the course designed under the “national policy”, they shared togetherness as the “compatriots of the war dead” and forgot about Japan’s weakness against Western powers by being more conscious about its strength. There is no description questioning the Japanese invasion of China. By contrasting themselves with “uncivilized” Chinese, the Japanese affirmed their cultural superiority and convinced themselves of the validity of the invasion and domination of China while finding satisfaction in the superiority of their ethnic culture. This study makes it clear that these perspectives made the Japanese look down on the Chinese who were supposedly “dirty”, “barbaric”, or “lacked in manners.”

**Keywords:** 『旅』、対中国観、戦跡巡拝

---

## 1. はじめに

世界各国が観光の重要性を認識している中で、国際観光の大衆化は注目に値する。昔から多くの日本人観光客が中国を訪れている。一方日本は、2000年9月に中国人の団体観光旅行が解禁され、ここ10数年間確実に増加している。特に近年多くの中国人観光客が訪日していることから明らかなように、中国人観光客は日本の観光産業の発展および日本経済の復興には不可欠であり、それはまた日中間の国際観光は言うに及ばず日中関係に重要な役割を果たすものと思われる。

以上の理由から、日中両国の社会状況及び時代状況において、日本人旅行者の対中国観や中国人旅行者の対日本観を考察することは、両国の歴史や社会研究における重要な研究テーマの一つであると考えられる。その際に留意すべきことは、現在の日本人の中国観には、少なからず近代日本人の中国観が影響を及ぼしているということである。

そこで本研究では、上記の問題意識に立ち、日本初の本格的旅行雑誌である『旅』を対象として、近代日本人の中国観を考察する。

具体的には、雑誌『旅』における1924年から1943年までの記事を通して、近代日本人がどのようなまなざしで中国及び中国人を見てきたのか、また、そうしたまなざしが、歴史的・社会的にどのように形成されたのかを考察していく。さらに、雑誌『旅』の中で何が語られ、あるいは何が語られなかったのか、またそれはなぜなのか、こうした点を明らかにしていきたい。

## 2. 雑誌『旅』について

雑誌『旅』は日本の雑誌の中でも異例の長寿を誇る、日本ではじめての本格的旅行雑誌で、大正13年4月に日本旅行文化協会（のち日本旅行協会となる）の機関誌として創刊された。昭和9年11月号から版元がジャパン・ツーリスト・ビューロー（現在のJTB）に移り、日本旅行倶楽部の機関誌になった。昭和12年7月に日中戦争が勃発、不要不急の旅行は止めるよう呼びかけられ、昭和18年8月号を以って終刊を強いられる。しかし、終戦の翌秋、昭和21年11月に復刊された。その後、2003年をもって休刊となったが、2004年新潮社より刊行され、2005年からは女性向けの旅行雑誌に変わった。

雑誌『旅』は創刊されてから常に読者のニーズに応じて、日本の観光動向を的確につかんできた。雑誌『旅』は、単なる観光地の案内、観光地情報、ルートを紹介する情報誌ではなく、執筆者は作家、学者、文学者などの文化人が多い。たとえば、旅行文化を研究している赤井正二は「戦前期の『旅』は、旅行に関する政策・研究・情報・科学・芸術・交流・討論等の総合的な雑誌であった<sup>1</sup>」と述べているように、その執筆者の人生観やものの見方、その情報の価値を高める基本的な考え方などを含んでいるのがその一つの大きな特徴である。それゆえに、本研究の目的である近代日本人の中国観の考察にあたっては、適切な資料であると考えられる。

## 3. 中国と中国人へのまなざし

### 3.1 「汚い」、「野蛮」、「礼儀が足りない」という言説

近代日本における悲願のテーマとしてあった「脱亜入欧」であるが、それはまた、日本の文明国化を実現することだけではなく、他のアジア諸国・民族を非文明的なものとして、未開視、野蛮民族視することにも力を発揮したといえる。当然のことながら、雑誌『旅』にもこのような言説をもつ記事が多くあり、その一部を雑誌『旅』から紹介しよう。

……三等車には妙な臭氣がこもつてゐる。それは大蒜を常食とし、汗と油に汚れた満人の體臭が充滿してゐるからである。然し大陸に住む者は此の不潔、此の臭氣を超越しなくては駄目だ。私も嘗てはあの所嫌はず唾を吐き、手鼻をかんでそれを窓と云はず椅子と云はず構はずなすりつける不潔さに泣きたい様な不愉快な氣持を味はつたものである<sup>2</sup>。

ここでは、「臭氣」、「體臭」、「不潔」、「唾を吐き」といった「汚い」を表す言葉を使うことによって、「汚い」中国人について詳しく述べるとともに、「汚い」中国人に対する作者の「不愉快な気持ち」も読み取れるであろう。

もう一つの記事をみていこう。

……奇麗に磨かれた靴をはき、折目のチャンとついた服を着て颯爽と家を出るまでは好いが、歩く大道には所構はず青睞がベト〜と吐き散らしてあるし、肩々相摩するところの中國人の半ば以上は觸るのもぞつとする様な汚い不潔な衣服で武装してゐるから厄介で

1 赤井正二「旅行の近代化と『指導機関』—大正・昭和初期の雑誌『旅』から—」『立命館産業社会論集』通号137、立命館大学産業社会学会、2008年6月、p.100。

2 粕谷益雄「滿洲の風物」『旅』日本旅行倶楽部、1942年3月、p.8。

ある<sup>3</sup>。

ここでは、中国人の「不潔」が強調して語られているが、自己の文化的優位性をなんとかして証明しようという意図が感じられよう。また、中国人を「他者」として認識するとともに、それとの差異によって、「自分」と「中国人」との距離を見ようとする「脱亜」の心象が隠されているともいえよう。つまり、中国人の「不潔」と対比させることによって、自己の「文明化」をさらに確認しようとしていたといえるのである。

上の記事からもわかるように、中国に出かけた日本人は、中国と中国人を「不潔」とみなしたが、そこには明らかに、中国や中国人に関する「汚い」という言説が見て取れるであろう。雑誌『旅』には、中国や中国人の「汚い」に関する実に多くの記述がある。ここでは、そのすべてを引用して詳しく述べることはしないが、当時中国に旅行した日本人の中国観が、「汚い」だけではなく、他にも存在していたことを、以下にみておきたい。

……全體の感じとしては、この邊一帶頗る原始的で、未だ何等著しい文化の影響をうけてゐない<sup>4</sup>。

……驛頭に集まる支那人は、乞食同然の姿を見せ、北に進むほど、文化の程度は低下し、その生活が原始そつくりの姿となる<sup>5</sup>。

この二つの記事からは、中国に出かけた日本人が、中国と中国人を「原始的」、「文化の影響をうけてゐない」、「文化の程度は低下」、「その生活が原始そつくりの姿」とみなしているように、中国や中国人に関する「野蛮」という言説が読み取れるであろう。

さらに、以下のような記事もある。

日本の旅館であると假令お客でもそれ相當の禮儀があるが、支那の旅館ではそんな氣兼ねは不要……<sup>6</sup>

ここで作者が強調しているのは、中国の旅館では「礼儀が足りない」ということであり、それとは対象的に、日本の旅館には「相當の禮儀」があるということである。

これらの記事からは、当時の中国に対する「汚い、野蛮、礼儀が足りない」という日本人の蔑視が明らかに読み取れる。これらのイメージは、福沢諭吉が日本国内に脱亜論を提唱したという状況の中で、中国に対する蔑視という雰囲気が醸成され、このような中国に対する先入観が、実際の旅行でも印象として記述されたといえるのではなかろうか。

また、日本人旅行者が中国を眺める時、帝国と侵略地・植民地（満洲）という不均衡な権力構造の下で、必然的に中国の洋車夫、苦力の生活風景と遭遇する。雑誌『旅』の中には一般の中国人についての描写は少ないが、中国の洋車夫、苦力に関しては、たくさんの記述がある。

---

3 渡邊公平「上海新譜旧譜」『旅』日本旅行俱樂部、1942年8月、p.16。

4 諸岡存「砲煙下に茶祖陸羽の遺跡を訪ふ」『旅』日本旅行俱樂部、1942年1月、p.59。

5 布利秋「内蒙古の南方を往く」『旅』日本旅行俱樂部、1937年12月、p.58。

6 村松梢風「上海を語る」『旅』日本旅行協會、1931年12月、p.11。

中国の洋車夫、苦力に対する侮辱と恐怖を端的に示す記事を挙げておこう。

それは僕が一歩驛の石畳を踏み出した瞬間に、たちまち洋車夫の重圍に陥つて了つたからである。彼等は口々に「洋車ー 洋車ー」と叫び乍ら、僕を目當てに突進して來るのだ。彼等の服装は滿洲最初の旅行者にとっては必ずしも快いものではない。背中に「奉○番」と番號札を縫ひつけてみるのがせめて信用の度合を保たせてはゐるが、皮膚にたまつた垢は象皮のやうにかたくなり、彼等の包圍攻撃に逢ふと大蒜の樽でもかぶせられたやうに僻易する。その上滿語が皆目わからない處へ、奉天の地理が全く不明だと來てゐるのだから尙始末が悪い。然し洋車に包圍されて悲鳴を擧げてゐる連中は僕ばかりではなかつた<sup>7</sup>。

「皮膚にたまつた垢は象皮のやうにかたくなり、彼等の包圍攻撃に逢ふと大蒜の樽でもかぶせられたやうに僻易する」という言葉で表わされたやうに、日本人は中国人の洋車夫に「汚い」というイメージを抱いたことが窺える。しかし、中国人の洋車夫はより差別的な視線にさらされていた。それは以下の記事から読み取れる。

僕の友人に、支那人のやうな日本人があつて、それが『車夫だけは、人間と思つちやいかんよ。動物と思つてゐるンだね。車に乗つたら思ひきり威張つてゐろ。』と、いつた。

この男は、もうかれこれ廿年も支那に居て、支那の婦人を女房にし、家庭では決して『日本語』を使はない。支那人の食物を食ひ、支那服を着て、腹の底から支那人になり切つてゐる男だ。

(中略)

だが、この車夫はアツパパの奥さま達を、如何にも誇らし氣に引つぱつてゐる。『動物』としては、可憐すぎる。ナカ〜僕には『動物』といふ觀念が掴み難かつたが、例の人道主義者のいふのによると、車夫になるのは、ドン底のドン底に陥ちた人間で、アヘン、バクチをやり人間的意識が全く喪失された動物に紙一重の人間である。すでに支那では一つの階級を形成してをつて、蔣介石も幾度となくこれが救済を試みたが失敗した。支那では、この車夫に言葉をかけると、非常に蔑まれる。威張つて車上にあり、相手を動物として見下してゐるこそ紳士で、人間である。つまりそれが車夫に對する道徳である。といふのである。それからあらぬか、支那の巡捕（巡查）が、ピユーと鞭を鳴らして、車夫を毆つてゐるのを街頭でよく見る。

しかし、この『動物』がゐないと、交通機關が止まり、アツパパの奥さまに至るまでが、八百屋通ひが出来なくなるとは、皮肉なことだ<sup>8</sup>。

このやうに、洋車夫は「動物」だと記されている。しかも、車夫を動物として見下すことこそ紳士であり、人間であるという内容で、車夫に對する道徳をでつち上げた。

こうした日本人の中国人洋車夫への視線は、中国人の苦力にも投げかけられたことが以下の記事からもわかる。

敢へて苦力に限つたわけではなくこの邊一帶の支那人についても言へることかも知れないが、實際彼等の煙草好きには呆れる。東京あたりでもよく鋪道の上に捨てられた巻煙草の

7 山下一夫「経行樂土三千軒—滿洲の生活を探る—」『旅』日本旅行俱樂部、1939年8月、p.49。

8 松井政平「漫々の見聞記」『旅』日本旅行俱樂部、1937年11月、pp.60~61。

吸ひ殻を拾つてゐるルンペン姿を見受けるが、大同の苦力は老人と子供たるの別を問はず、兵隊さんの投げ捨てた煙草の吸ひ殻を飛びつく様に拾つては美味しさうにのんでゐる。食ふや食はずの生活をしてゐてもきざみの入つた煙草入れと雁首のでかい煙管だけは持つてゐる彼等だ<sup>9</sup>。

このように、中国人にも富裕な階層はあつたはずで、また、最下層の「洋車夫」「苦力」でなくとも、庶民としての中国人がいたはずである。洋車夫、苦力だけが日本人旅行者の目に強く映つたことは、当時の日本人が中国に向けていた視線の角度を明らかに物語っている。こうした「下向きの視線」こそが、当時の日本人の対中国およびアジアの一つの基本姿勢であつたことは明白であろう。そこには、アジアを「他者性」において認識するとともに、それとの差異によって日本の「先進性」を確認しようとする「脱亜」の心理が隠されているといえよう。洋車夫、苦力といった最下層の中国人のところまで転落してゆくことによって、日本人と中国人の間の差異を大きくし、日本人の心の中の「文明化した日本人」と「野蛮な中国人」とは、精神的、内面的にバランスのとれたものとなるのである。単に汚い洋車夫、苦力が中国には多いということであれば、それは侮辱と恐怖を伴つてはいるものの、不潔である、不衛生であることの客観的表現にすぎない。しかし、これらの記事に共通しているのは、中国人の洋車夫、苦力の「汚さ」「悲惨さ」「悪臭」を強調的に描き出すことによって、彼らを日本人より劣位、劣等に置こうという差別的感覚であるといえるだろう。

### 3.2 現地の人々との接触

日本人が中国に出かけた時に持つていたまなざしを考える時、現地の人々と、どのように接したかという問題は重要であろう。雑誌『旅』の中で、日本人と洋車夫や苦力との接触をみてきたが、雑誌『旅』の中ではまた、日本人が仕事関係で中国人の鉄道職員によく待遇されたこと<sup>10</sup>、知人である中国人の有名なインテリや大富豪のお宅を訪ねたこと<sup>11</sup>、また、実業家である中国人と同じ車に同乗したこと<sup>12</sup>、さらに、お店で中国人の上流階級の夫人に親切にされたりしたことなども書かれていた<sup>13</sup>。当時の日本人が中国人と接していたことは明らかである。しかし、注目すべきは、日本人が接した中国人は仕事関係で接している職員や上流階級の中国人であつて、庶民としての中国人は登場していないという点である。そこで、筆者が読んだかぎりにおいて、雑誌『旅』の中に、唯一、例外といえる記事があるので紹介しておきたい。

南京鎮江蘇州の寫生も一先切り上げて上海へ歸つた。そして今度は杭州行だ、北站驛から快車で六時間だ、車中邦人の五六名に會つた、異郷で同胞に會ふのは懐しい皆教育家達で見學旅行滿鮮を経て來たそふだ、ワイシヤツなどがひどく汚れてゐたのが目についた。筆談で無聊のまゝ支那青年と時局を談じたが矢張日本の帝國主義は嫌だそして<sup>14</sup>日支親善と云つても到底日本の支那に對する今迄の處置を見ては永久親善にはなれない、日本の資

9 渡邊公平「大同書信」『旅』日本旅行俱樂部、1938年3月、p.29。

10 飯島利安「鮮、滿、支を歴遊して」『旅』日本旅行文化協會、1924年4月、pp.56～57を参照のこと。

11 有名な中国人インテリ宅訪問は、澤村幸夫「支那の正月」『旅』日本旅行俱樂部、1938年1月、pp.40～41を参照のこと、中国人の大富豪宅訪問は、三田村鳶魚「從軍談餘」『旅』日本旅行俱樂部、1937年11月、p.71を参照のこと。

12 中井元一「北平より熱河へ」『旅』日本旅行俱樂部、1935年6月、p.100を参照のこと。

13 河合澄子「ハルビン漫話」『旅』日本旅行協會、1931年3月、p.32を参照のこと。

14 「嫌だ」と「そして」の間に句読点はないが、原文のまま引用した。

本侵略主義、領土的侵略主義、これが無くならない以上は到底兩國國民は相容れないと云つてゐた、なか〜話せる師範大學出身で工部局に勤務してゐるとの事であつた……<sup>15</sup>

この記事には、汽車の中で中国人の青年と時局について筆談したことが述べられている。中国人の青年は、「矢張日本の帝國主義は嫌だそして日支親善と云つても到底日本の支那に対する今迄の處置を見ては永久親善にはなれない、日本の資本侵略主義、領土的侵略主義、これが無くならない以上は到底兩國國民は相容れない」と述べているが、執筆者自身は日中關係についての考えを述べてはいない。

現在の海外旅行を考えると、外国へ旅行をして最も思い出に残るのは、やはり地元の人との触れ合いだろう。旅行をしていて地元の人の家を訪ねたり、地元の人との会話を楽しんだりして、よりその国に対する理解も深まるといえるからである。上の記事に見られるような日本人と中国人の青年との接触は、ごく普通で当然なことである。しかし、このような日本人と中国人の接触は、当時としてはめずらしく、一般の日本人の常識ではなかつた。以下、二つの記事を挙げておく。

……折角の支那大陸の旅である以上、出来るだけ呑氣に、のんびりと悠揚迫らぬ氣分態度でみられるのでなくては意味をなさぬ。始めから支那が怖いやうな氣がしてゐては、支那宿に泊るなど思ひもよらぬことである。支那宿にとまれないやうな支那旅行と云ふのでは、日本の旅の延長に過ぎぬ。よく奉天ヤマト・ホテルから北平の北京飯店に、そして上海のカセイ・ホテルに又はアスター・ハウスにと廻つて来る旅行者がある。而もつとめて支那人との接觸を避け、洋食で通さうとする者がある。その人は身なりが又洋服で、そして目的地に到着するとすぐゴルフにと出かける。英語で用足しをする。これでは丸で洋行したつもりなのでせうと云つてやりたくなる。クラブのメンバーあたりにもこれが多い。支那の旅の眞の持ち味から云つて、かゝるやり方は無味乾燥。自分どもの到底堪へられぬ旅行ぶりだと云ひたくなる<sup>16</sup>。

……最後に僕は京包線を半月近く旅した或る人の感想を書いておかう。それは僕が包頭から大同へ歸へる汽車の中で聞いたものである。

「私はさつぱり蒙疆へ來たといふ氣持になれないで困つてゐる。宿屋へ行けば高くて美味しくもない日本食ばかり食はせられるし、友人を訪ねて行けば決つた様に日本の料理屋へ連れて行かれて同様の日本料理に日本藝者のサービスだ。半月もゐて一皿の支那料理にもありつかなかつたのですから支那へやつて來た様な氣分になれなかつたのも當然でせう」<sup>17</sup>

当時の歴史的、社会的状況から考えると、後述する「戦跡巡拝」や「視察旅行」で、現地の人々から隔離された日本人達は、現地の人々と接触する機会が少なかつたであろう。ところが、上の雑誌『旅』の記事に見られるように、日本人は意図的に中国人との接觸を避け、日本料理や洋食を食べたり、ゴルフをしたりして、中国人に無関心であつたとさえいえるのではなからうか。

しかし、せつかく外国に出かけるなら、その国の独特のエキゾチシズムを求めることが、普

15 小室孝雄「南支行脚(二)」『旅』日本旅行協會、1930年8月、p.144。

16 後藤朝太郎「支那の旅 三題」『旅』日本旅行俱樂部、1936年12月、p.149。

17 塩貝聖平「宿屋我觀大陸版」『旅』日本旅行俱樂部、1939年4月、p.41。

通の旅行者の心理である。だとすれば、日本人の旅行者の目に映ったのはどのような風景であったのだろう。ここでは、三つの記事を見ておこう。

夜吉野町通りを歩いて見ると、此處は完全に内地人の世界であつた。日本人は滿洲へ來てもしるこを食ひ、おでんを食べ、日本の着物を着て生活が出来るのである。裏通りはライオン、銀パレス、新京パレス、モンテカルロ、ミス東洋、銀座會館等と云ふカフェーが並んで、銀座や新宿の裏街を完全に再現してゐた<sup>18</sup>。

何も彼も日本色—これぢやちツとも面白くネイやと滿洲旅行團が言ひさうな現状です。嘗て、帝政ロシアが作つたこの町に、いまや吹き荒ぶ日本の嵐。舊北鐵の接収が、これに一段の拍車を加へたことは勿論であるが。日を追うて成長する滿洲國と躍進日本の實力とが國際都市ハルピンを漸次純日本式に塗りかへて行くのである<sup>19</sup>。

……この町は事實は長城内支那側にあるが、日の丸の旗各所に翻り皇軍〇〇國境警備の爲め駐在して居る。町には日本人の姿を多く見受けるが、ドテラやインバネス姿、若い日本婦人などの町を參々伍々歩くを見るとまるで日本へ歸つ□<sup>マ</sup>様な氣がした<sup>20</sup>。

滿洲や中国は外国であつたにもかかわらず、なぜか「完全に内地人の世界」であり、「日本へ歸つ□<sup>マ</sup>様な氣がした」との記述からもわかるように、旅行者たちの目に映った不思議な風景は、「外国でない」滿洲國の特異な性格と、当時の中国が「日本色」に塗られたことを物語るものであつた。滿洲や中国にロマンチックな憧憬を抱いた日本人旅行者にとっては、そのような「内地風」「日本色」の現実に対して、幻滅に近い感情を持ったとしても不思議ではない。

雑誌『旅』における記事では、日本人が現地の人々と接した場面もあつたが、その多くは中国人との接触を避け、また「文明帝国臣民」である日本人旅行者として、列車の車窓から現地の人々を眺めていたことが以下の記事から窺える。それは、未開の世界、異質の他者を見る「文明帝国臣民」の視線にほかならない。

大きな都會を中心とした一部の地域を除いては未だに中世紀の夢の中に生きてゐる支那にあつては、敢へて奇とするにも當らないが、火車（汽車）を利用しない又利用し得ない生活層が現在でもかなり廣範圍に亘つてこの國には存在してゐる。支那を旅行すると蒲團を背負つた落魄者の群が鐵道の沿線をレールに沿つて力なく歩いてゐる風景をまゝ見かける。だからこの韃靼街道が山西南部地方から厚和への最捷路として、今尙幾組かの不幸な旅人達を毎日のやうに送り迎へしてゐるとしても少しも不自然ではない。まとまつたお金があれば乗れない火車は彼等には文明の利器でも文化の恩典でもない赤の他人なのだ<sup>21</sup>。

この記事から読み取れるのは、日本人は、中国の人々を、風景の一部であるかのように眺めていたことである。また中国人からの視線を想像することによって、自分自身を〈文明〉の側に置き、中国人達は〈野蛮〉の側にあることを確認したといえるのではなからうか。つまり、

18 山下一夫「経行樂土三千軒—滿洲の生活を探る—」『旅』日本旅行俱樂部、1939年8月、p.56。

19 田章一「北滿に見る東京音頭風景—日本語氾濫時代—」『旅』日本旅行俱樂部、1936年7月、p.13。

20 中井元一「北平より熱河へ」『旅』日本旅行俱樂部、1935年6月、p.103。

21 渡邊公平「韃靼街道」『旅』日本旅行俱樂部、1939年11月、pp.16~17。

中国の人々が、自分達を文明国人として見てくれることを期待したのである。ここに、「野蛮」な中国人に対する、「文明化」した帝国臣民の優越意識が明らかに窺えるだろう。

## 4. 隠蔽されたもの・忘却されたもの

### 4.1 戦跡巡拝

上でみてきたように、当時の日本人は中国に行っても、中国人との接触を避けていた。日本料理や洋食を食べ、ゴルフをするのであれば、日本国内でも十分楽しめたわけで、わざわざ中国に行く必要はなかっただろう。多くの日本人旅行者にとって、果たしていったい何が見るに値するものであったのだろうか。雑誌『旅』の「大陸旅行の心得」と題する記事を見ておこう。

陸の生命線大陸は祖國日本にとって國防産業上の要衝であるだけでなく私達のささやかな生活にまで直接に又間接に大きな響きを持つてゐる。殊に再三度に亘る聖戦により水よりも濃い尊い血によつて培つてき大陸は私達の父がそして兄弟が殉國の靈地であり歴戰取撫の跡であるから一度は訪れて敬虔な祈りを捧げ以つて黎明の新天地に嚴肅なる認識を求めることが私達平和の戦士に遺された義務であらうと思ふ<sup>22</sup>。

大正末期から満洲旅行は一つのブームになった。しかし、日中戦争が勃発すると、娯楽的な旅行は、時代にふさわしくないとして制限されたが、「戦跡巡拝」をテーマとする旅行は行われた。上の記事から読み取れるのは、中国への旅行は、個人的な楽しみというよりは特別な意味がこの旅行に付与されていたということである。つまり、日本軍勇戦の地で敬虔な祈りを捧げ、「戦死者の同胞」としての一体感を共有することによって、「日本国民」としての意識を一層強固にさせたということ強く物語っているといえよう。

では、日本人旅行者は中国をどのようなコースで旅行したのか。昭和14年8月号の雑誌『旅』に掲載されている旅順戦跡巡拝と大連観光の都市バスコースを紹介しておく。

旅順戦跡巡拝バス訪問箇所：白玉山（納骨祠・表忠塔）—戦利品陳列館—東鶏冠山北堡壘—水師營會見所—爾靈山（激戦地二〇三高地）

大連観光バスコース：山の茶屋—忠靈塔—大廣場—満洲資源館—大佛—星ヶ浦（晝食）—露天市場—油房—碧山莊—埠頭<sup>23</sup>

このように、コースは忠靈塔、二〇三高地などの戦跡記念地見学が多くを占め、ほかに名勝旧跡や町の風景が織り込まれていた。日本人旅行者は中国の歴史上の史跡も訪れたが、雑誌『旅』に中国の名勝旧跡を讃えるような描写はほとんどない。当時の日本人旅行者の関心は、「戦跡巡拝」であったことは間違いないであろう。では、その「戦跡巡拝」は具体的にどんな内容であったのだろうか。

遼陽半島の一角に位して、風光明媚、氣候の温和、他に比類なき天恵豊かな港である。と云ふだけでは物足りまい。旅順は母國をして今日あらしめた國威發揚の港である。

戦跡の重なるもの東鶏冠山、望臺、二龍山、松樹山、白玉山、惡戰苦闘の爾靈山は二〇

22 山本三平「大陸旅行の心得」、『旅』日本旅行俱樂部、1940年4月、p.68。

23 『旅』日本旅行俱樂部、1939年8月、p.69。

三高地として衆知の山。港口左方は軍神廣瀬中佐戦死の場所。日露の兩帥和を講じた劇的場面の水師營。武士の典型乃木將軍愛兒の英靈二つながらに、莞爾と微笑む爾靈の詩。

爾靈山險豈難攀。男子功名期克艱。

鐵血覆山山形改。萬人齊仰爾靈山。

(筆者訳：爾靈山は険しくて、なんと登るのが難しいことか。日本男児は功名を立て、艱難を克服せんとした。どす黒い血が山を覆い、山の形も変わった。誰もがみんな爾靈山を仰いで、日本男児を偲ぶであろう)

等々、涙ぐましい挿話はそれからそれへと繰返されるのである。旅順の港は血河屍山の地、日本魂練磨の道場である。尊い港である<sup>24</sup>。

昭和4年12月、日本旅行文化協会の会員は、協会主催の鮮満視察旅行中の感想をこのように述べている。この記事から、その視察旅行は、「戦跡巡拝」であることが読み取れる。戦跡で最も有名な都市は、日清・日露両戦役の激戦地・旅順である。メディアによって、その地名は良く知られたが、特別な感情を抱いてその場に立ち、現地駐屯の軍人の話を聞いたならば、旅行者は、あらかじめ持っていた強くて素晴らしい日本軍のイメージを、さらに現地で実感することによって感激を新たにしたことだろう。

#### 4.2 「戦跡巡拝」を通して、忘却されたもの

上で見てきたように、日本人旅行者の関心は日本軍の戦跡にあつて、旅行コースもまさに「国策」に限定された中国を見ていた。現地の人にとって特別な意味を持たない小さい二〇三高地が、日本旅行者にとっては重要な歴史的意味を持っていたことから、なるべくして聖地となったことは想像に難くない。しかしなぜ、二〇三高地のような日本軍の戦跡が、日本人旅行者にとってそれほど見るに値するものであったのだろうか。これに関して、19世紀フランスの歴史家・思想家エルネスト・ルナンは、「国民とは何か」の中で、以下のように述べている。

国民とは魂で、精神的原理です。実は一体である二つのものが、この魂を、この精神的原理を構成しています。一方は過去にあり、他方は現在にあります。一方は豊かな記憶の遺産の共有であり、他方は現在の同意、ともに生活しようという願望、共有物として受け取った遺産を運用し続ける意志です。人間というものは、皆さん、一朝一夕に出来上がるものではありません。国民も個人と同様、努力、犠牲、献身からなる長い過去の結果です。祖先崇拝はあらゆる崇拝のうちでもっとも正当なものです。祖先は私たちを現在の姿に作りました。偉人たちや栄光（真正の栄光です）からなる英雄的な過去、これこそその上に国民の観念を据えるべき社会的資本です。過去においては共通の栄光を、現在においては共通の意志をもつこと。ともに偉大なことをなし、さらに偉大なことをなそうと欲すること。これこそ民族となるための本質的な要件です。人は自ら同意した犠牲、耐えしのんだ苦痛に比例して愛するものです。自分が建て、譲り渡した家を受するものです。スパルタの歌謡「われらは汝らの過去の姿なり、われらは汝らの今日の姿たらん」は、その単純さにおいて、およそすべての祖国の簡潔な賛歌なのです。

過去においては共有すべき栄光と悔悟の遺産、未来に向けては実現すべき同一のプログラム。ともに苦しみ、喜び、望んだこと、これこそ、共通の税関や戦略的観念に合致した境界線以上に価値あるものです。これこそ、種族と言語の多様性にもかかわらず、人々が

24 五味青舟「鮮満の旅」『旅』日本旅行協會、1929年12月、pp.118~119。

理解することです。いま私は、「ともに苦しみ」と申しました。そうです。共通の苦悩は歓喜以上に人々を結びつけます。国民的追憶に関しては、哀悼は勝利以上に価値あるものです。というのも、哀悼は義務を課し、共通の努力を命ずるのですから<sup>25</sup>。

このように、ルナンは「国民とは魂で、精神的原理です」として、「記憶の遺産の共有」によって成り立っていると述べている。また、「国民的追憶に関しては、哀悼は勝利以上に価値あるもの」だと言うように、哀悼は勝利以上に価値があり、それはまた、いわば歓喜以上に国民をつくと強調しているといえよう。こうして、日露戦争後、“日本国民”の意識が高まった中で、記憶の遺産を共有する、つまり、集合的記憶という意識が強まっていったのだと考えられる。日本人旅行者は兵士として日清戦争・日露戦争に参加せずとも、日清戦争・日露戦争の戦跡に行くことによって、「過ぎ去った過去の栄光」を共有できたわけであり、さらに「英霊」を哀悼し、感激の意を表して「戦死者の同胞」としての一体感を共有することによって、日本国民・日本帝国国民としての自覚を一層強めることができたといえるのであろう。

しかし、「忘却……それこそが一つの国民の創造の本質的因子なのです」<sup>26</sup>と強調されているように、ルナンのネイションに対する考え方は「記憶の共有」に留まらない。それは、以下の記述からも明らかである。

……国民の本質とは、すべての個人が多くの事柄を共有し、また全員が多くのことを忘れていくこと<sup>27</sup>。

ルナンが強調しているのは、国民は「多くの事柄を共有」、つまり、記憶の遺産を共有すると同時に「多くのことを忘れていく」ということであり、すなわち、忘却を共有することによってネイションが作られるというのである。上で見てきたように、日本人旅行者は「戦跡巡拝」を通して「過去の栄光」、つまりその遺産を共有できたといえる。であるとすれば、共通の忘却の対象とはどのようなものであったのであろうか。以下にみておきたい。

中曽根の言葉にあるように「汚辱を捨て、栄光を求め」というように忘却と記憶を一まとめにしてみると、一方における汚辱の記憶の積極的抹殺から、他方における栄光の積極的記憶に至るまで、一つのスペクトラムを描くことができる。

すなわちその記憶を「暗殺」しようとする断乎とした忘却の対象を一方の極にして、ついで記憶の対象から外すことによって無視すべきものが位置づけられる。そして同じく記憶の対象とする場合でも、忘却に近い領域から積極的に記憶し顕彰すべきものに至るまで、比重の大きさの違いが記憶の強さに関係してくる。

そうであるとすれば、まず忘却の対象と記憶の対象とを選別する基準は何であるかが問われなければならない。その基準を行為の種類からみれば、残虐行為のように記憶の主体にとって好ましくないものが、記憶の対象から排除され、好ましいものが記憶の対象に含まれることになる。そして記憶の主体にとって誇るべきものは強く記憶され、好ましさの

---

25 エルネスト・ルナン・鶴岡哲訳「国民とは何か」エルネスト・ルナン等著『国民とは何か』株式インスクリプト、1997年、pp.61～62。

26 エルネスト・ルナン・鶴岡哲訳「国民とは何か」エルネスト・ルナン等著『国民とは何か』株式インスクリプト、1997年、p.47。

27 エルネスト・ルナン・鶴岡哲訳「国民とは何か」エルネスト・ルナン等著『国民とは何か』株式インスクリプト、1997年、p.48。

度合にしたがって記憶の強度が決定される<sup>28</sup>。

このように、共通の忘却の対象は「記憶の主体にとって好ましくないもの」にほかならない。「戦跡巡拝」は日本人にとって誇るべきもの、つまり「過去の栄光」を想起させるものであり、「日本国」を強く意識化させると同時に、日本人にとって好ましくないものを忘却させるものであるといえるであろう。その忘却の対象は、中曽根元首相の言葉を借りれば、「汚辱」である。だとすれば、日本人にとって「汚辱」の過去とは何を意味したのであろうか。

明治初期の政治家や知識人は、日本は西欧列強と同じレベルの国家でないばかりか、むしろ「日本は弱い」のだということ認識し、日本国家に対する深刻な危機意識を持っていた。それゆえに、明治政府にとって西欧列強との間の不平等条約の改正は重要課題であり、西欧列強との国際的に対等な地位の確立を目指そうとした。しかし、日本人は日清戦争・日露戦争を経て、徐々に「強い日本」を意識していった。さらに、「戦跡巡拝」という集合的記憶を通して、戦死者はいたものの、「日本は強い」と思い込むことによって、「日本は弱い」ということを皆で忘れることにしたのである。国策旅行や「戦跡巡拝」というものは、「弱かった頃の日本」を忘却するためのいわば通過儀礼となったと言えるだろう。

## 5. おわりに

これまで考察したように、大正13年から日中戦争の終わりまでの時期、中国に旅に出かけた日本人は、中国人との接触を避け、中国の歴史上の名勝旧跡にも関心を示すことなく、「国策」に限定されるコースで、自国の栄光の戦跡めぐりを通して、「戦死者の同胞」としての一体感を共有すると同時に、「日本は強い」と意識することによって、「日本は弱い」ということを忘れることにした。皆が「日本は弱い」ということを忘れていなければ、「国を変えよう」という言動が出てきて当然であるにもかかわらず、雑誌『旅』のなかには一切そういうことは表れてこない。

また、日中戦争により悲惨な現状を目の当たりにして、「一掬同情の涙を催す」<sup>29</sup>と記されているように、同じ時代に生きている中国人に同情した日本人もいるにはいたが、中国人に苦しみを与えることになった日本の侵略は間違っているという記述は一切ない。つまり、語られていない。それはなぜか。おそらくそれは、雑誌『旅』がマジョリティ側に向けた雑誌であったことから、当時の日本社会のマイナスの側面は語られず、プラスの側面しか語られなかったからであろう。要するに、「日本は弱い」ということをすっかり忘れることにしたがゆえに、マイナスの側面は語られなかったのであろう。ここでいう「国家」とは、「強い日本」としてであり、そうであるから国家はそのままよしとされて、マイナスの側面は語られず、むしろ「国家の形を変えよう」という意識もいっさい出てこなくなったと考えられる。つまり、日本による中国への侵略は暴力以外のなにもでもなく、理不尽なことであるにもかかわらず、個々の日本人は違和感も持たなかったということであろう。

日本人はあらかじめ持っていた中国・中国人への先入観を確認しつつ、中国人を「野蛮」に位置づけることによって、自己の文化的優位性を確認し、中国への侵略・統治の正当性を納得させるとともに、自民族の文化の優位性に満足していたのである。その結果、中国を未開南国として、また中国人を野蛮な他者として、「汚い」、「野蛮」、「礼儀が足りない」、といった、い

28 石川雄『記憶と忘却の政治学—同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店、2000年、pp.267~268。

29 五味青舟「鮮満の旅」『旅』日本旅行協會、1929年12月、p.117。

わば「下向きの視線」で見ていたことが明らかにされたのである。

さて最後に、残された課題について述べておきたい。本論文では、扱った資料の期間が限られていたことが挙げられる。それゆえ、今後は、その期間を拡げるとともに、本論文で考察した「旅」の領域以外で、日本人はどのような中国観を持っていたのか、また、雑誌『旅』の中で、戦後 70 年にわたって、日本人の中国観はどのように変化してきたのか、さらに、中国人旅行者の対日本観の変遷についても考察していきたいと考えている。